巻頭特集

生き続ける伝統の火祭り
がんがら火

晩夏の夜空を焦がす炎、鳴り響く八丁鉦（はっちょうがね）の音。
江戸時代から続く池田の夏の風物詩は、
城山・建石の2つの町で継承されてきた。
五月山に灯す「大一」「大」の文字火。
高さ4メートルの大松明が市街を巡る、
迫力あふれる城山町の大松明。
松明を持った子ども達が巡行する、
建石町の厳かな子ども松明。
大阪府指定無形民俗文化財「愛宕火（がんがら火）」。
受け継がれる伝統と熱い想いを取材した。

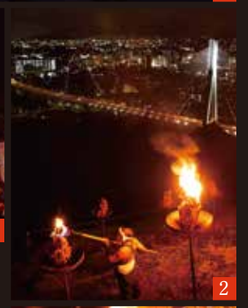
江戸時代より続く火伏（ひぶ）せの祭礼

毎年8月24日、決まってこの日に行われる愛宕火（＝がんがら火）の祭礼。池田市の城山町と建石町、2つの町がそれぞれ「大一」（城山町）、「大」（建石町）の文字火を五月山に灯し、八丁鉦を響かせながら大松明（城山町）、こども松明（建石町）それぞれのスタイルでまちを練り歩き、御灯明（ごとうみょう）を人々に届ける。家内安全、無病息災を願い、火伏せの祭礼として江戸時代から今日まで受け継がれてきた。

愛宕火の起源は、伊居太神社蔵『穴織宮拾要記（未）』（1727年ごろ）によると、1644年に地元の旦那衆である多田屋・板屋・中村屋・丸屋の4人が五月山山頂で灯した火を、まちの人々が「池田に愛宕が飛来した」と集まって来たことが始まりとされている。防災設備の整っていない時代、生活に欠くことのできない火は人々にとって身近であり、脅威でもあった。〝火伏せ・防火に霊験のある神社〟として名を馳せる京都の「愛宕神社」を池田でも崇めることを人々は喜び、そうして五月山と「愛宕神社」、及び火伏せの神への信仰とが繋がっていった。

信仰による静かな祭事は、時代を経て形を変えている。松明による文字火も、『伊居太神社日記』の1819年に大明ヶ原に「大」の文字火が、鳥居付近に「二」があったとの記述があるも、これ以前に行われていたとされており、いつから始まったのかは不明だ。時代の移ろいと共に、現在の形に変わり、継承されている。

取材協力／池田五月山大一文字がんがら火保存会（城山町）、池田五月山大文字がんがら火保存会（建石町）



1 19時30分に小松明から文字火へ点火　2 秀望台での文字火の献灯は、約1時間。火床は2名で管理する　3 さくら通りを抜けて、駅前へと進んでいく2基の大松明　4 池田城山町交差点での最後の見せ場「四本立て」。近くに「愛宕神社」の御旅所があり、神様への挨拶の儀礼として行う

火を届け、恐さも伝導 城山町の大松明

五月山山頂の「愛宕神社」から貰い受けた御神火を、秀望台の南斜面にある「大一」の文字に点火し、重さ100キログラム、高さ4メートルの大松明を担いで若者達が巡行、最後には愛宕神社御旅所に火を納める。それが城山町の「がんがら火」だ。神事や祈祷が行われる8月24日の「愛宕神社」大祭でおこされた火を、御神火として十二双（付け木）へ移し、さらに小松明へと移す。掛け声を上げながら、〝さらしに股引姿〟の若者達が神社を出て山を下っていく。昔、城山町には大工が多く住んでいたことから、伝統的な大工装束の出で立ちなのだそうだ。

山を下った先の油掛地蔵下。ここで小松明から大松明へと火を移し、高張提灯（たかばりちょうちん）と、次世代を担う子ども達の松明の列による先導のもと、八丁鉦を鳴らしながら大松明は旧市街の細道を慎重に進む。引っ張る、押すの動作で市街を巡り、最後は栄町の作業場前にある御旅所（おたびしょ）に火を納める。

松明の先端部分に縛られた肥松（こえまつ）（土中に残った、油を多く含んだ松の根）からは油が垂れ、担ぎ手の肩や背中を刺激する。しかし、城山町の人にとっては、大松明による火傷の痕は「男の勲章」であり、火を操る者として大松明を担げるという誇りの象徴だ。道に落ちる「からけし」と呼ばれる松明の燃えかす、そして役員が持つ提灯から移す御神火を、火伏せのお守りとして届ける。家を守る火と共に、火の恐ろしさ、大切さを伝えているのだ。

粛々と子ども松明が灯明を届ける建石町

鉢巻きに法被姿の建石町の子ども達が、竹で作った松明を持ち、鉦の根を響かせ町内を練り歩く、厳かな雰囲気。8月24日が地蔵盆であることから、建石町の「がんがら火」は〝子どもの行事〟として執り行われている。

5月に京都の「愛宕神社」より貰い受けた御神火を、建石町のシンボルである「星の宮」で温め、8月24日にその種火を提灯に移す。昼頃には鉦を担当する子ども達が少し早めにやってきて、伝承された「カンカン、カカカン」の叩き方で町内に祭りの開催を知らせる。「星の宮」で子ども達がお参りをし、その後五月山の「山の家」を目指す。「山の家」に到着後、高学年の子ども達は御灯明と共に大明ヶ原へ。提灯の御灯明は火床へ分けられ、「大」の文字に点火。山の家まで下山後、待機する子ども達の松明にも火が分けられ、再び「星の宮」を目指し、まちを巡る。人々は松明からロウソクに火を貰い、仏壇に供え、家内安全を願う。

城山町「大一文字」

五月山の「愛宕神社」から貰い受けた火を、五月山の秀望台下の斜面で点火。猪名川に架かる呉服橋からだと、よく見える。

建石町「大文字」

京都「愛宕神社」から貰い受けた火を、建石町の「星の宮」に供え、五月山の大明ヶ原にて点火。「池田市役所」から向かって正面に見える。

発展し続ける、〝無形〟の火祭り

口承により続いてきた「がんがら火」。毎年松明を作っては燃やし、また翌年同じように燃やす〝形〟の残らない祭りだ。だからこそ、両町民の「もっと良くしたい」という想いが、守るべき芯は守りながらも、時代と共に形を変えて今の「がんがら火」を作った。無論、今年も伝統の火は燃える。

1 14時に八丁鉦を鳴らして町内を周り、まつりの開催を知らせる　2 五月山の大明ヶ原を目指し、出発　3 点火を終えて下山し、星の宮へ　4 星の宮の小大文字に火を移す

文／小木曽優美　デザイン／小林亜由　写真提供／北川哲也（城山町写真）、池田市役所（建石町写真）